



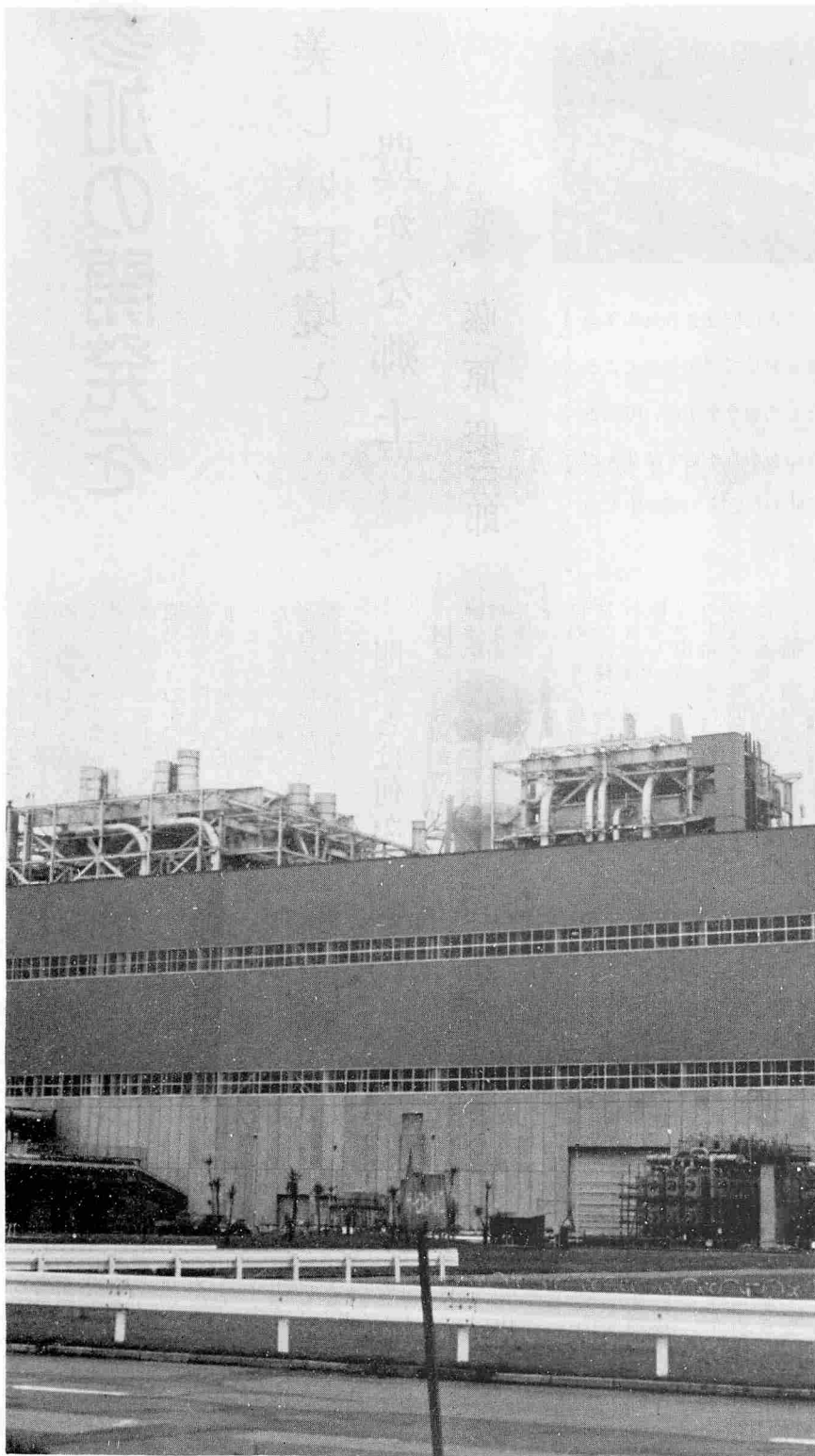
鹿島 広報

No. 166

昭和51年

12月13日発行

発行・秋田県天王町役場 電(018878)2211~4
 編集・企画室 印刷・秋田協同印刷 電(0188)237477~8



▲ 空高くそびえ立つ集合煙突(鹿島火力発電所)

——住民五十名が見た鹿島——
 夢と希望に満ちた
 豊かな郷土を！
 開発には自らの意志で

住民参加の鹿島臨海工業地帯先進地視察研修が6月23日から26日までの4日間にわたり行った。

この研修は住民が先進工業地帯を視察し、自分の目で見、確かめて今後の秋田湾地区工業開発に対して自覚も新たに正しい判断力を養ってもらうために実施しているものである。

研修も今年で四年目を迎え参加した人員も約二百名を数えました。参加者は今年も各部落、各種団体より五十名の参加を得、十班に編成し、研修に際してのレポートをとりまとめていただきました。

今後、天王町においても工業開発におけるメリットやデメリットを実践的に把握し、郷土開発にあたっては自らの手で悔いのない判断を養い、豊かな町づくりを進めるためにも大きな期待が寄せられています。

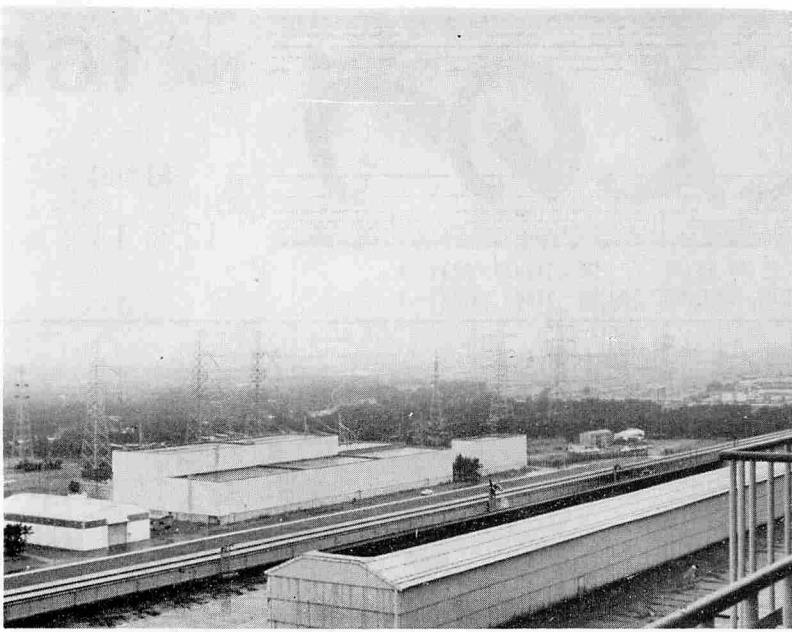
住民総参加の開発を



天王町長 藤原慶三郎

美しい環境と

豊かな郷土



▶ 広大な鹿島臨海工業地帯

冷害に悩まされた本年もあと数日で新年を迎えようとしておりますが、町民各位におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

実践的な 体験のなかに

秋田湾地区開発計画にあたり住民に見聞を広め、認識を深めてもらうために実施してまいりました鹿島臨海工業地帯の研修視察も本年で四年目を迎え、町民各層の代表からなる研修人員も約二百名の参加者を数えました。

町民、一万五千人の中のごく少数の代表者の方々ですが現地で実際に目で見、肌で感じてきたことは今後の秋田湾地区開発計画の策定にあたり大きな役割を果たすものと思われま

開発とは何か

この研修視察は開発計画にあたっての住民の是、否を問うために実施しているものではありません。「百聞は一見に如かず」ということわざにあるように実際に先進工業地帯を視察し開発の目的や、現状、公害、農業問題等開発による利害得失を正確に把握して正しい認識を得るとともに、本町の開発に貴重な意見を反映し、住民総参加の行政と開発を目途に行っているものであります。

開発によるメリットはいろいろあるでしょう。所得の向上、雇用の促進増大、経済活動の助長等、その波及効果は計りしれないものがあります。特に、本県のような積雪寒冷地である地域では経済の開発を行わなければならぬ現在、大きな社会問題となつて出稼き問題の解決や出稼きによって生じる家庭の不和、また、低所得県からの脱皮等、諸問題の本質的な解決にはならないと思ひます。反面、開発によるデメリットが多いことも事実です。工業開発はその進め方を誤ると生活環境や自然環境を破壊するばかりでなく、地元産業に荒廃をもたらし、その損失は多大なものがあると思われま

豊かな町づくりは 自らの手で

出稼き問題の解消、県内産業構造の改善を計るものであります。既にご承知のとおり、秋田湾地区開発計画には町及び議会も、「無条件には賛成するものではない」との基本的態度は始終変わりありません。しかし、当然のことではあります。町づくりの担い手は住民自身であり、住民自から「より豊かな、住みよい郷土をつくりあげる」ために判断を要するところなく、千載に悔を残す事のない開発を進めるための判断力を養うことが大切であると思われま

悔いのない 開発を

この研修に参加された方々は事前、事後研修会にも積極的にとりくまれ、またその後、地域においても研修会を実施されるなど大きな成果をあげております。

去る、十月十九日、県では秋田湾地区開発計画の素案について発表いたしました。これはあくまでも現段階での考え方と断りながら、県会全員協議のうえで行ったものです。この素案は県が取りこんでいる秋田湾地区開発計画の基本計画策定作業の経緯を明らかにさせることともに、作業そのものに対する意見を反映させるため県では開発局がまとめた部門検討資料としての計画素案を示したものであります。

この素案は、
一、開発の必要性を中心とした意義

二、開発地区の概況
三、開発の基本方針及び目標

四、開発の主要施策
五、開発効果

六、開発事業の進め方
七、開発地区を中心とする県全体の二割に位置する秋田湾地区に海面埋め立てによる離島方式の銚子工業基地を建設し、関連企業を誘導しようとするものであり

これにより若年層の職場確保、

※ ※ ※

この問題に関しては本町にとって最も重大な件であり、住民各位とも真剣に考え、将来に悔いを残さないよう決意を新たにして懸命の努力をいたす覚悟でございます。よろしくご協力、ご理解を賜りますようお願い申し上げます

人口増に伴う

新旧住民の

融和を

第一班
 児玉英逸 村山幸男
 石川智恵 伊藤勝太郎
 伊藤テツエ 伊藤津佳子
 佐藤和雄

公害問題に 万全の対処を

三泊四日の日程で行われた、第四回目の鹿島研修に参加の機会を与えて下さった、関係各位に感謝申しあげますと同時に、以下この研修で感じたことをまとめてみました。

陸の孤島といわれてきた、鹿島の工業開発は地元住民にどのようなメリットとデメリットを与えたか、ということである。三泊四日の日程ではそのすべてを知ることは困難であるが、まず、工業開発につきものの公害問題がある。

一口にいうと、私どもが当初考えていたことよりも公害は少ないような気がした。

地元住民との対話の中では、公害観測テレメーターの購入の際に、汚職問題がおき、そのことをとりあげ非難していたが、これはあくまでも事務的な問題であるように思われた。

公害問題については、公害がまったくないわけではない。例えば、水である。工業用水の導入の影響をうけている地域によっては、水不足の現象が起き、飲料水に影響を来しているという。

秋田湾地区の工業開発計画では、これ等の点について十分な計画のもとでの開発計画が必要だと痛感しました。

新、旧住民のふれあいを大切に

また、大規模な工業開発に伴って、大巾な人口増加が必然的に考えられると思うが、この人口増加によって生ずる、新、旧住民の融和の対策が必要だと思ふ。地元住民はPTA等の会合で次第にうちとけてきている、とは言うものの、言葉の違いで数々のトラブルもあったという。この問題については、社会教育のあり方が大きく取りあげられるでしょう。

鹿島では立派な中央公民館があるが、地域での公民館活動はまだまだの感がある。

幸い、本町の場合、分館組織が強化されているので、今からこの点を考慮した日常活動が必要だと思ふ。

農業振興の

対策を

つぎに、農業問題である。鹿島の農業は、離農者の増加や、後継者の問題で年々、後退の一途をたどっています。

鹿島町では、このことに苦慮して農業振興のための対策を検討中とは言ふものの、具体的な施策はないという。このことは鹿島住民のいう、工業開発の影響によることも充分考えられるが、ある面では全国的に共通する農政上の大きな問題でもあるように考えられた。

秋田湾地区の場合も、農家自身が、農業に対する意識を強固なものにしておかなければ、鹿島の二の舞いも起りかねないと痛切に感じた。

生活環境 施設の整備



鹿島先進地視察団一行（鹿島火力発電所前にて）

いま、一つ大きな問題は、私ども住民が日常生活を営むうえで直接、関係のある生活環境施設の整備の点である。

鹿島では工業開発がすべてに優先して行われ、日常生活をとりまく生活環境施設の整備は後追いの形で進められている。

例えば、住宅街のスプロール化である。いくら工業開発による税収等の収入の増加があっても環境施設の整備が追いつかない現象が生ずるものと思われた。このことよって考えられることは、長期的な展望にたった、都市計画であり、この都市計画を軸としての生活環境施設の整備であると思う。これらの整備がなされてこそ、初めて工業開発が生きてくるものと思う。

以上、問題点についてののみ申しあげましたが、開発によるメリットも数多くあることは言うまでもないことである。それはなんといっても経済的な豊かさである。私どもはこの経済的な豊かさを真の豊かさにするためにも、前記の問題点を慎重に考える必要があると思う。

なぜなら、この開発は我々々のための開発であるから！



住民のために 公害のない開発を

第二班

鈴木鎮治郎、桜庭 幸男
菅生 吉雄、嶋崎 節
桜庭 君子、伊藤ナミ子
安田美和子



鹿島町の地元住民との話し合い

町が計画している、鹿島臨海工業地帯に研修団員として視察する機会を得て、今後の秋田湾大規模工業開発に伴う、将来の天王町の参考になったと思っております。

鹿島町を二日間にわたり、見聞いたしました。ここは工業開発以前は農業が主体で、しかも零細農家の多かったところだ

農業衰退の 鹿島

県では、農、工両全をスローガンのもとに現在に至っておりますが、農業行政に対しては農民たちの不満の声があるように思われました。

鹿島町も開発以前は農業を基幹産業としていたが、今は工業が優先し、現在、町の収益金が五十五億数千円で、ここ十年間で約三十倍位になっているそうです。しかし、人口の増加に伴い公舎、住宅の新築等によって町財政は赤字状態との事でしたが、近い将来は、先進する町のようにうけました。

がなければ町民を守ってゆく事ができないと思えます。鹿島町では、農、工両全といいますが、農業行政にはあまり真剣味がないようです。それが故に、年々、農業に専従する人々が少なくなり、開発と同時に農地は、年ごとに減少し、農家戸数は専業農家より兼業農家に代ってゆく状況です。

昭和三十五年で専業農家が一千二百戸あまりあったのが、現在では、六十戸たらずで誠に遺憾に思います。それでも農業に意欲のある農家は施設園芸等に従事、それ相当の収益をあげて

いるようです。しかし、若い人たちは農外収入に移行し、私たちは、一抹の淋しさを覚えました。

公害対策には 厳しく対処

大規模工業開発と同時に公害という厄介な物が付着しているようなイメージがあるが、公害防止には行政と企業が一体となっていて、大気、水質の汚染には県と町で監視体制を厳しく、又、それに対応して企業側も莫大な費用を投資して、公害防止設備に積極的に協力しているように思えます。

鹿島町では役場の向いに自動的に濃度を測定できる、亜硫酸ガス常時監視装置を設置しています。私たちが最初に視察したのは住友金属鹿島製鉄所でした。

バスで一巡し、そのなかで、作業工程等を説明され、従業員も関連会社を含めて、一万五千人以上のお話でしたが、あまりにも広大な土地であるが故に働いてる人の数もまばらのような感じをうけました。

何を見ても大型で、その運動している人だけのように見うけられた。次に、東京火力発電所に行き内部を視察いたしました。

そこでは、タービンなど、機械一式が部屋に居ながらにしてテレビで撮影し、コンピュータで、データ等を調べ、少ない人数で一切、行われているのに驚くばかりでした。

続いて、し尿処理場を視察。まず、どこかの企業の敷地内を見ても、すべて緑と花に囲まれ、一見、公害のないように思いますが、企業の増加、増設に伴い長い年月によって大気、水質の汚染がないとはいえない点が多分に感じられました。

鹿島町も四年目になるので、だいたい町民の方々にも知っていただいたいと思えますが、以前に鹿島の工業用水について闘争があったそうです。

その概略をのべてみますと、この闘争はさまざまな側面の展開をみせているので、私たちに直接、間接的に、秋田湾開発の参考になるのではないかと、思っています。

鹿島臨海工業地帯の各工場に工業用水として供給するために、県の企業局が建設したものがありません。

第一期工業用水日量、二十五万トン、第二期工業用水日量、六十万トン、第三期工業用水日量、五十三万トンと続き、いづれも北浦(霞ヶ浦)の一部から取水しているもので、この第二期工業用水(一九七〇年)着工の送水管施設に必要な土地提供を地元の農民が拒否したため、

県企業局が機動隊をもって代執行を強行した事件です。公共性という名のもとに鹿島では工業用水を霞ヶ浦から自由自在に使っています。そういう事が公害の企業であつても許されることではありません。

秋田湾地区開発の場合、残存湖の水か、あるいは海水でしょうが、もし、秋田も鹿島と同じようなことが繰り返されるならばその影響は、私たち住民におおいかぶさってきます。

何よりも恐ろしい工業排水。現在では化学の進歩により、薬品に薄められて基準をパスするが、底泥が年々、蓄積され、公害となつて現われているのも事実です。

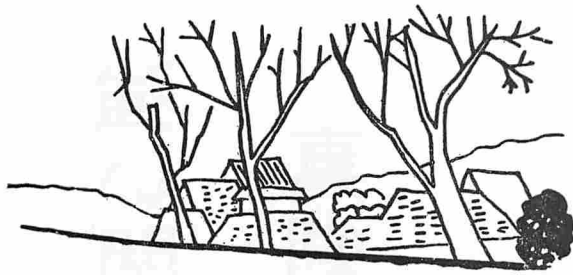
住民の期待に そつた開発を

秋田湾地区大規模工業開発は農、工一体のもとに進められておりますが、いくら基幹産業が工業に代つても農業行政には、尚一層の指導を強力に進めることを望みます。

秋田湾が死せる海とならないように配慮し、農民の生命である農地、また漁民の生命である海が失われてゆく事のないよう切望いたします。

鹿島では、就職問題も地元優先という事でありますが、若い人下請業者者に依存しているし、機械化が進んで、人手をそんなに必要としない実態を目で確かめてきました。

最後に、本町においては雇用問題、環境保全、公害問題、福祉の向上等をはかり、計画の策定、事業の推進については、住民の意志を充分反映させ、住民の期待にそつたようをお願いし、よりよい天王町でありますことを望みます。



開発は双刃の剣

第四班

中村 ミチエ 大関 治助
 加藤 道文 藤原 ナミ
 柳川 邦徳 山田 永昌

今年で四年目を迎えた、鹿島研修視察団の一員に選ばれ、その責任の重大さに身の引き締まる思いで参加いたしました。

昭和三十九年、純農村地帯であった鹿島に臨海工業地帯造成の鉄が入られ、以後十二年、鹿島は大きな変貌をとげました。

これから工業開発の道を進み中心地域ともいえる本町はそこから何を学び、失敗の轍を避け指針を探るべく、全神経を集中させなければならぬ。

施設園芸

にも影響

今年に入り秋田湾開発構想が製鉄や、その関連企業と具体的になった現在、公害は製鉄関係にしぼられる。

我々、一行を乗せたバスは構内を一巡し、職員よりいろいろと説明があった。

原料の飛散防止に努め、原料ヤードへの散水、構内路面の清掃も行われていた。

緑地は、一面ホワイトクローバーが植え込まれ、大気汚染防止にも充分、努力している事が理解できた。しかし、それでも微粒粉塵により、施設園芸農家の間でビニールの耐用年数が半減し、光線の透過を防げ、作物が生育しないという問題が起っていた。

生活環境整備

の立ち遅れ

昭和五十一年度の予算を本町と対比してみよう。

本町の人口約一万六千人、一般会計予算、十億七千万円に対し、鹿島町は人口約三万七千人一般会計予算が五十五億五千万円であるが、生活関連施設の整備は立ち遅れている。

一、二例をあげれば、公共下水道事業は昨年、スタートしたばかりで、生活道路である町道の舗装化率をみても、わずか二十パーセントという低さである。そして、投資額も、昭和四十七年をピークに大幅な落ち込みをみせている。

昭和四十八年の石油ショックが財政をも直撃し、経済状況が財政に大きく影響していることが伺える。

農家数の減少

住民との対話の席で、工業開発に終始、反対を唱えてこられた飯塚氏は、みずから「少数民族」といって我々を笑わせた。

さらに、「開発が農業を破壊した」と。では、農業者が猫の額程の土地に立って「農業を守れ」と、叫び農業に専従した方がよかったのだろうか。

開発が進み、専業農家数は、十年で一割に減少し、一種から二種兼業と地すべり現象が起きた。

農業数の減少を関東農政局は農業所得が他産業に比べて低く過重労働、流通体制の不整備とあげている。低所得、開発禍と分析するのだが、農家側からみて、開発は禍ではなく、福でもあったはずである。

昭和四十九年の鹿島町の一農家所得は約九十一万円で、昭和五十年の所得は約百二十九万円とのびている。

今後とも、食料の自給率を高める努力は大切である。我が国の農業は機械化貧乏を始め、農業構造に手を加えなければならぬ。点が多い。

現在、我が国の就業構造は、一次産業、約十二パーセント、二次産業三十七パーセント、三次産業五十三パーセント。昭和六十年代の予測では、一次産業六・七パーセント、二次産業横ばい、三次産業が増大し、今後の就業構造が次第に先進工業国型へ移行してゆくことを理解せねばなるまい。

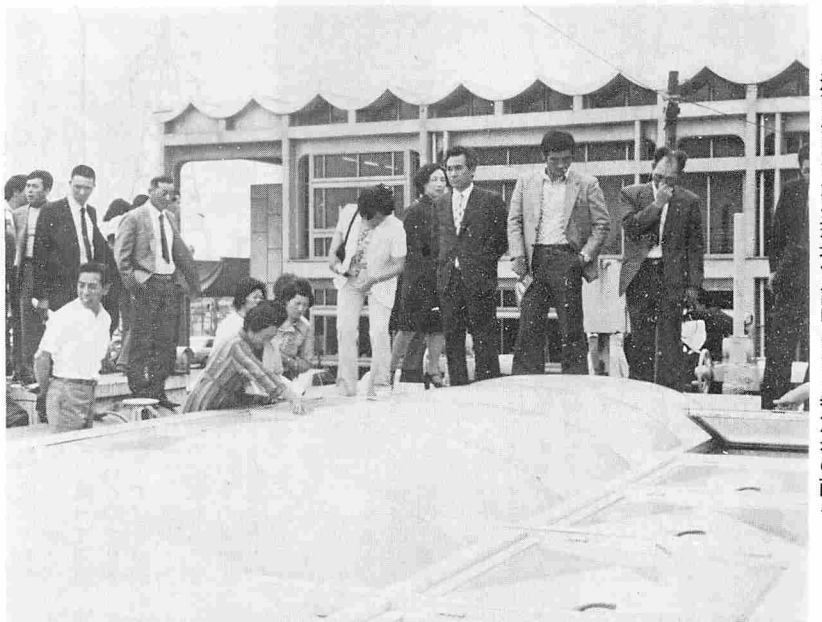
開発にもなる

メリット、デメリット

集団移転をはじめ、社会構造の激変は、対人関係に大きな摩擦をうみ、そして、経済的成長は「他人の世話にならなくともいくらでも食べてゆける」など人との付き合いのない都市代現象の波は、次第に人々に浸透し生活の孤立化がみられるのである。

開発は物質的には豊さをもたらしたが、精神的にも豊さをもたらした。とは疑問がある。天は、二物を与えずか。

大規模工業開発から大きく後退し、秋田湾地区開発となった事は、むしろ喜ばしい。主として、原料の輸出国であるオーストラリアの国民の過半数は二十才以下の若年層であり、今後、労働力が増大する、開発途上国で経済的自立を目指す。このような国際環境から今後原料の安定供給が得られるのか鹿島を始め、工業地帯で野放し状態である地下水の工業用水の利用は充分研究せねばなるまい。

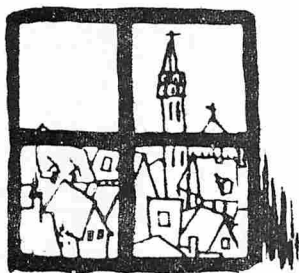


深々共同汚水処理場で説明をきく参加者の面々

浸食しないものかどうか。

鹿島では地場産業の育成に力を入れていくがなかなか難しいようである。

公害問題も、気象条件次第で微粒粉塵の被害は避けられまい。



強い関心と

真剣な討議

第五班
 菊地貞雄 小仲厚三
 佐々木清美 佐藤久雄
 菅原与一郎 関谷甚二郎
 古山金治郎 安田優子

今回の視察研修を終えて、最も印象的であったのは、参加者の強い関心と、意欲的な行動であった。いわゆる「反対のため」の反対とか、「観念論」は全くみられず、終始、真面目な話し合いと、観察がいたるところで行われた。これは、秋田湾開発が現実の問題として身近に迫ってきていることと、これまで三回も視察団が派遣されて問題点の把握と理解が進んできているからであろう。

視察中随所に事態を正確にとらえようとする団員の視線がつきささった。住民代表との懇談会の中でも極端な否定論である「C」さんは完全に黙殺され、是を是として否とすると、良識派の「A女士」と、公害防止運動に尽力し諸問題に精通している人気者の「熊さん」に質問が集中した。秋田の人は口が重いというが住民との懇談会でも、住友金属東京電力、汚水処理場の説明会

でも、次々と休む間もなく質問が出され、活発な論議に終始したのである。

開発は何のためにあるのか

我々の考え方の原点は、開発のメリットとデメリットの的確な把握であり、何のための開発であるか、という点にある。鹿島工業地帯の開発は長い歴史の貧困から解放を目ざした大自然への挑戦の一大ドラマであった。

我々の秋田湾開発も惨めな、「出稼ぎ」からの脱却と、より豊かな生活を希求してのものでなければならぬ。革新論者の表現をかりれば、「大資本のための奉仕」のみであっては困るのである。確かに開発の利点は多いであろう。鹿島においても(1)道路の発達、(2)鉄道など交通諸機関の充実、(3)公共施設の建設、(4)商店街の発展、(5)地元企業への就職増加、主婦のアルバイトの多様化など、いわゆる「雇用の促進」が著しいが故に、家庭の悲劇である「出稼ぎ」も解消されそうです。子弟が次々と郷里を離れて大都市に就職し広い屋敷に老夫婦がしみじみと

淋しさにくれる、といった風景も少くなるでしょう。しかし、よいことばかりではない、開発によって生ずる「自然破壊」と「公害の発生」が最も重大な難題なのである。したがって視察団の眼は当然のことながら、自然破壊と、公害の発生が鹿島においてほどの程度に防止されたか、に注がれた。

ひじょうに進歩した 公害防止対策

鹿島では、進出各企業が公害防止を重くみて防止対策にそれ相当の努力を払ったことは評価できる。莫大な費用をかけた、巨大な脱硫装置、工場全体を覆う緑化対策、製鉄工場内原料貯蔵ヤードのスプリンクラー（散水）装置、同工場の汚水の集中浄化施設、工場冷却水の再利用方式等、数多くの公害対策が導入されていた。その効果については、先発工業地帯の千葉四日市、水島などに比較すれば大きな差があることは間違いない。しかし、それでも完全には公害を防ぎきれなかったようである。

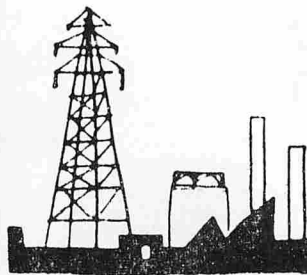
地下水の枯渇、水質の汚染などが一部にみられ、現在、表面化はしていないが数年後に心配される大気汚染による喘息発生などが気にかかる。

公害なき

開発のためには

各工場の公害防止施設の説明のなかに、折にふれ「最近では、世論がきびしいので」という発言があったがこれは何でもない言葉のようだが、実はきわめて重大な発言なのである。それは裏をかえせば世論がうるさくなければ、公害対策はやらぬということになるからである。公害防止なくして企業の開発と発展はない、という立派な企業理念の経営者もいるかもしれない。しかし、企業は「エコノミック・アニマル」の言葉に象徴されるように、飽くことなく利益を追求するのがその本質であること。又、公害防止は気の遠くなるような巨額のお金がかかることで原則的には企業の利益追求と相反する性質のものであることを知るべきであろう。

公害防止のため 強力な住民 運動を組もう



我々の周囲の自然環境は恵まれている。このような緑に包まれた郷土は少いだらう。清潔な地下水、清浄な大気、何とすばらしいことではないか、宝物ともいうべきである。

私達は、このすばらしい環境の価値を見失ってはなるまい。何としてもこの大切な環境を守らねばならないのである。前述のとおり、世論がきびしくないと公害防止は行われないのだから、あなたまかせの傍観者であっては環境保全は期待できない。好むと、好まざるにかかわらず、我々は行動する住民となつてこの重大な問題と取りくまなければならないのである。

我々、第五班は研修旅行が終つても、班の編成はとかないことを全員で申しあげた。折にふれて、集つて問題を掘り下げようというのである。話し合いのなかで、この問題を含めて、住みよい郷土、よりよい生活のためにはあらゆることは公民館活動がその基盤となるということも確認された。

短いレポートのなかでは言いつくせない事が多い。特に農工両全政策は鹿島では全く失敗したが天王町ではどうあるべきか水の低きにつく経済原則に任せてよいか、この問題は重大である。

その他、建設途上の諸犯罪防止、港に出入りする船舶による海水汚染、失われてゆく漁業地の救済対策など、数々の問題が提起されてくるだらう。

近々に、県の開発マスタープランが提示されるというが、我々は過去の先人たちの試行錯誤の歴史と体験のなかに尊い教えを見出しながら今後の道を行んでゆかなければなるまい。



火力発電所の中を視察する住民の方々

私たちの環境を大切に

「秋田湾地区工業開発」構想を県が発表した直後にこの住民研修に参加し、私たちの班は研修の感想としてだけでなく、秋田湾工業開発をふまえての若干の提言を含めて研修のまとめとしてみました。

工業開発で一番心配なのは公害防止と、環境の保全ができるか、ということ。工場から出る汚水で魚が臭くて食べられなかったり、出戸浜での海水浴が出来なくなり、大気汚染でゼンソク患者がでたり、家のトタン屋根の錆が早くなるのでは困ります。

によるビニールハウス汚染の被害がでており、海水汚濁のため魚貝類の多量の変死が有りました。住友金属工場内外には臭臭の臭気や着色水の問題が有りました。

秋田湾に建設予定の鉄鋼一貫の製鉄所などによっておこる公害と自然破壊は大気汚染、水質汚濁、工場の騒音、粉塵、煤煙などから、と予測されています。これ等の防止には工場が秋田湾に建設される前に発生源で公害をゼロにする防止施設の整備を企業、県、町の三者で公害防

公害防止と 環境保全を 最優先にした 開発を

止協定を結ばなければならぬ。協定を結ばない企業の進出は許さないこととし、協定には公害がでたり、基準を超えた場合、解決までの操業停止と完全補償をもちこむ、また、公害測定装置は最箇の場所に多く設置し、測定資料を定期的に公開すること。さらに、住民による監視態勢をつくり永続させるなどが必要と考えます。

農業、漁業の 発展を

鹿島町の専業農家が四十一年の八百七十二戸から、五十年の七十四戸に激減し、「農業団地」は住宅化し、僅かなビニールハウスと、あとは荒廃した土地が続いていました。「農、工両全」はつくられた虚像であり、実際にはあり得ない、といわれています。

秋田湾開発は海面埋立てのため、鹿島のようなことはないと思いますが、開発が出稼ぎ者の解消とか、工場従業員の住宅地とかで、「農業を単なる労働力と、土地供給の場」と考えているなら、農業は衰退するでしょう。

秋田県の基幹産業である農業をより発展させることを主眼とした施策を優先し、実行する開発でなければならぬと思えます。このことは、埋立てや工場排水などで大きな被害をうける漁業についてもいえることです。単なる補償金ですすませるのではなく、漁民の働く場を確保する施策が必要です。

第六班

越前屋英三 草階金五郎
佐藤昭義 鎌田あき子
丸ノ内千代

地元雇用を 最優先

鹿島では企業の進出で、役員増員と、主婦のパートなどが多くなり、就職の場が増えていきます。が、一方では出稼者も多くなっています。これは、工場がコンピューター化して進出企業の労働力が既存工場からの配置転換が主で、地元雇用は約三割、それも雑用的単純労働が多いためのようです。

秋田湾開発は、労働力需要を拡大し、新卒者や出稼者などに就労の場を提供する、とありますが、これを現実にするためには各工場の従業員の半数以上は地元雇用とし、身分を保障させる。コンピューター操作など、特殊技術を修得する場をつくるなどが必要。又労働災害をなくする設備を充実し災害が起つたら原因を追求、解明し、ふたたび、災害を起さぬ設備を完備するまで操業を停止し、災害者の完全補償も重要なこととす。

開発による問題 解決は住民 参加で

。三万人以上の従業員を受け入れる施設や関連公共整備とその費用は。
。県内外から流入するもの、地元住民との地域社会づくりは、それにとまらぬ教育は、
。企業スロープが進出し、地元商業は圧迫されないか。
。その対策は……など、
開発による問題は山積しています。

これらの問題解決は、県や企業のペースではなく、地元住民の参加する場で住民の納得する解決が必要です。事によっては、県や企業の圧力に対抗する住民運動をおこすことも考えておくべきと思えます。

秋田湾開発が現実のものとなってきた現在、鹿島研修の開発によって美しい自然が破壊され生命がむしばまれ、心の荒廃が残らぬよう慎重に進めることを私たち班のまとめの結論といたします。



大規模な設備に目をみはる視察団（鹿島火力発電所にて）



人口増による都市化現象

第七班

綿織 清子
菅原キヨノ
武藤キクエ

企業優先の開発

当初は「公害のない開発なら」と考えましたが、開発してみたら地域のための開発ではなく、企業のために有利な開発であった、とのことでした。

去る、六月二十三日より三泊四日の日程で、鹿島臨海工業開発地帯の研修視察に若妻会、並びに婦人会代表として参加させていた機会を得ましたことを厚くお礼申し上げます。

粉塵による気管支公害も

にわたり視察に参加された方々のご意見を「公報てんのう」で読ませていただきましたが、実際、私達の見で、耳で聞いた事、感じた事を自分たちなりに書いてみたいと思います。

第一日目は、新しい鹿島町の官庁街とでも申しましょうか、いずれも近代的な建物の立派なものには驚きました。これも一重に開発の賜だと思われれます。当日は議会開会中とかで町当局者のご意見をお聞きすることはできませんでしたが、係の方から一応説明があり、午後より町民の方々から直接、開発に対するご意見を聞かせていただきました。

とされます。このように患者の多くなる原因は、明らかに粉塵のためであるとの事で、工業地内に縁が多くあるということ、これは、恐らく感じました。この点は、私たちの町でも充分、考えなければならぬ問題だと思っています。

何ら対策のない非行問題

次に非行問題ですが、心の荒廃があまりにもひどく、野放し状態であるため、他からきた婦人達を慰めるよりない、とのことでした。

表面化する公害問題

P.T.Aを主体とし、子供たちを中心に、新、旧、住民のふれあいをはかっているという、このことは私たち、天王町の一部にもみられる傾向であり、私たちが進んで行っている事と同じ考えであった事がうれしく思いました。

町民の方々の話では、公害問題は農業に対する公害はもちろんだら公害患者が多く出てくるだろうと、お話をしていました。第一に気管支関係の患者が多く出てくるでしょうとのことでした。また、企業で働く者の中には死亡者も出、精神的な病人や肺病が多く出るのはないか

いており、高校卒業後の女性は地元の会社や役場等に就職できるし、家庭の主婦も働ける場はいくらでもあるとの事でした。

自分たちのことは自分たちの手で

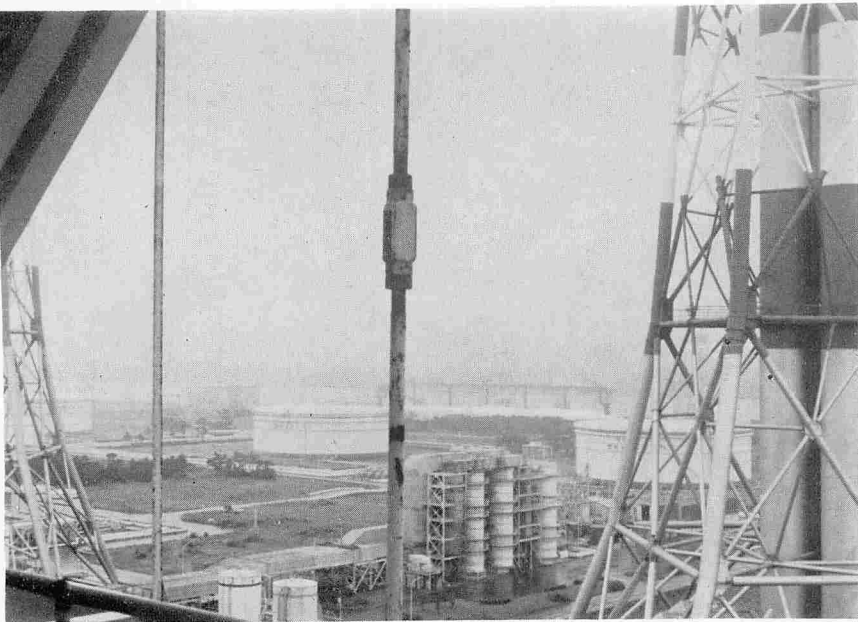
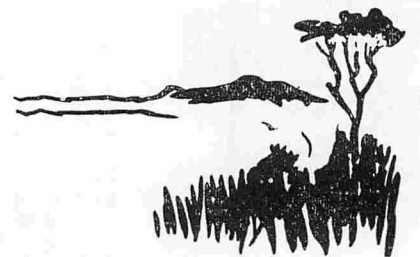
深く追求して

消費生活については無公害食品、中性洗剤の中止を呼びかけているそうです。これは私たち公害のないところで考えるべき事であり、現に、工場が建ち、何らかの支障がある土地ではもつと別の意味で深く追求して

最後に町長さんより「これから開発するために、何か参考になるご意見がありましたら」と伺いましたところ、飯塚熊太郎さん事、熊さんなる方が「他からの押付けではなくあくまで自分たちの事は自分たちでよく考え、人間性をうしなわれないことのないよう開発を考えたほうがよいと思う」とのご意見を述べた。

私達も、国や県からの押付けではなく、できる限りの条件をだし、それをとり入れてもらえるようがんばらなければなりません。二日目は、住友金属東京電力深芝汚水処理場を見学いたしました。さすがに、いずれもその規模の大きさはただ目をみはるばかりでした。汚水の処理等は石油精製、石油化学、機械金属、火力発電等のコンビナート工場が立地するため、大量の汚水を排水するので公害については懸念されましたが、悪質汚水については流す前に各工場等で前処理をした後の流水なので、あまり

問題はない、とのことでした。秋田湾工業開発にはできる限りたくさんの地元民がよろこんで就業でき、公害の少ない企業を誘致してほしいと思います。最後に、今後、ますます天王町の発展をお祈りするとともに研修視察の報告といたします。



鹿島火力発電所より工業地帯の一景

熱心に係員の説明を聞く視察団一行



開発にともなう 経済の発展

第九班
安田 勝雄 菅井 林一
村山 殿

第四回、鹿島臨海工業開発地帯の研修視察に参加する機会を得ました事を心からお礼申し上げます。

私たちは水戸市からバスで最初の目的地である、鹿島町役場に向ったのですが、折り悪く雨のため途中、車窓から外の状況がよく見えぬ残念でした。約一時半で鹿島町役場につきます。午前中は中央公民館に於いて役場職員から開発の進行状況と町の現状等について説明を聞き、午後からは住民代表との話し合いが行われたのですが十人くらい出席の予定だったのが三人しか出席せず、しかも、この方々は極論過ぎる程開発に対して反対であったようで、開発によるメリットなど一言も聞くことができず、悪い面ばかり指摘しておりました。あまり片よった代表者のように感じ、幅広い意味の対話にならないくらいであったように思います。

高い 鹿島の メリット

開発による功罪はいろいろありますが、私たちが見た鹿島は開発によるメリットの方がはるかに大きいと思えます。鹿島町は開発により急激な人口増加を示しており、開発当初は今の本町の人口とほぼ同じ一万六千人くらいだったのが現在では三万七千四百人あまりになって

おります。それでも当初予定していた人口よりは少ないということですが、これは開発によって鹿島町内の地価が急激に高騰したため、転入者は土地を求めにくくなり、周辺町村の比較的安い土地を求めて住み、そこから通勤する人たちが相当にでてきているという話でした。

又、財政の伸びにおいては十年間に約二十三倍の規模になっているということ、五十一年度予算は一般、特別会計、合わせて約六十九億円近いものであり、しかもこの大半は固定資産及び諸税の収入であるというから羨ましく感じられました。しかし、これだけの財政規模でありながら、あまり楽でないという事です。それは急激な人口の増加や無計画な乱開発による宅地造成等に対し、生活環境整備等が遅れているため、それらの整備が急務となっており、大規模な財政投資が必要であるということ。しかし、これ程の財政力を持ってすれば住みよい工業都市鹿島への町づくりは一步、一步、着実に進むものと思われま

脱農家の増加

農工両全の旗印のもとにこの地方一帯の貧困からの脱却を目指して進められた工業開発でしたが、開発が進むにつれて生活様式の都市化とともに地価の高騰をまねき、農業に対する意欲の減退を生みつつあるように私たちがまわって見て目につくのは畑の荒地が多く見られた。又、農業団地というところもあつたがあまり利用されていないようです。ビニールハウスは時々見られますが少数の農家だけが営んでいるようでした。町の行政指導、そのものも悪いでしょうが、何とんでも農家自身の農業に対する意欲の減

退が一番大きな原因と思われる。専業農家は激減し、今は十年前の十分の一に減っており、一種兼業農家から更に、二種兼業農家へと移行が多くなつてきており、それだけ農外収入への依存度が高いといえると思えます。



商店の 販売の激化

開発が進むにつれて都市化も進行し、消費者人口の増加と生活水準の向上等によって商店全般の年間売上げは伸びてきているようですが、商店数の増加に伴って、昨年と今年に続いて大型スーパーの進出により販売競争が激しく、既存の小売店は大きく圧迫されて伸び悩みの状態にあるという事です。又、国鉄鹿島線の開通や道路網の発達などによって購買力は水戸市や京葉方面へと商業環境は著しく変り、既存商店街はこの急激な変化に対処するため経営の近代化合理化を進めるなど、その対策に苦慮しているとの事である。

公害対策に 大型投資

私たちは二日目、バスで住友金属、鹿島火力、深芝汚水終末処理場の順で見学しましたがその広大な開発地域と工場規模の大きさに感嘆いたしました。住友金属の説明では、同工場だけの用地の広さは七百町歩だそうです。又、公害防止設備にはこれまで、六百億円を投じているそうです。そして、鹿島火力も能力においては、秋田火力とは比較にならない程規模の大きいものであり、ここでも公害防止設備には四百億円投じて各企業とも公害防止には最大の努力を払っていることが何れも明らかになりました。

役場向いには公害観測所があつて、そこにテレメーターを備えて付けて、鹿島地域内の各所の汚染状況が標示板に現われ、一目で解るようになっていて、規制値を超える所がある場合は、公害発生工場を調べて処置を講じるようになってきているという事でした。

地域を一巡してみました、それ程公害に見舞われているとは思いませんでした、むしろこれからはますます発展するだろうと思われ、姿を見て、実にすばらしいことと思つてきた次第である。

秋田湾工業開発もこれまでにいろいろと論議されており、秋田県の将来の経済的発展のためにも大いに期待しております。

☆☆☆

現実に対応した 開発を

第八班
三浦 林一 鈴木 菊男
桜庭伊佐子

先般、私たちは、鹿島大規模工業開発の先進地視察の一員として参加し、この目で見て、はだに感じた点について、感想をのべてみたいと思います。



大がかりな設備投資に驚嘆の声が……

第一に農業問題であります。鹿島の太陽と緑、農、工両全のローガンのもとで開発されたようですが、現在の鹿島をみる限りでは、農業経営はなりたないといえます。たしかに鹿島と本町の場合、立地条件が多少なりとも異なるかもしれませんが、本町の基幹産業として将来に農業を残す考えであるなら、

はつきりとした計画のもとで、住民との対話を重ねると、鹿島のような姿にはならないだろうという感じがいたします。

第二に公害の問題であります。たしかに見学した工場地帯の資料の数字にみる限りにおいては公害の心配はないようですが、特に見学コースの途中の鹿島製鉄所について疑問を感じざるをえません。あの異様な臭い、そして鉄粉で外気が変色している状態が公害がないといえないと思います。ただ、数字のみによることなく、現実に見合った公害の測定方法、ならびに防止に取り組みむべきではないだろうか。

人間形成に

重点を

第三に人間関係の問題があります。鹿島で住民との対話の中ではやはり深刻な問題のように感じました。多種、多様な人間が異なった立場で仕事につき、生活するために問題が生ずることは当然かもしれませんがそこで生活する人間性の問題でなからうかと思えます。

今後、本町も工業開発が進むことは明らかである以上、常に人間教育に力を入れ、来たるべき時にそなえるべきでなからうかと思えます。

第十班
三浦 兼
菅原 アエ子

優先する工業開発

農業を忘れた鹿島

まず、よく見、よく聞いて確かめるのが私たちのねらいでした。が今回の研修では、やはり、大企業が目ざましい発展と、高度な技術でのあらゆる公害防止の設備等が目をついた。すでに町全体が工業化ムードの中で生き、そして力強く進んでいる感じがうけました。大企業より、あらゆる角度からの援助で、町の玄関は高層な庁舎が立ち並び、町の行政面においても工業優先といった感じが強くうけました。が反面工業の発展とはうらはらに、年々弱体化してゆく農業の姿を見せつけられた感じがいたしました。

豊かな生活の中に心の貧しさが

工業開発にはつきもので、一時的に支払われた多額の補償金におぼれている農村の姿。豪華な住居に住み、高級乗用車を乗りまわし、泥くさい農業を忘れていく感じがうけ、非常に残念に感じました。また、農協の組織の弱さも見逃すことができ、ません。組合としての集会、青年部、婦人部等の集いも見出すことも出来ず、我々農業を営む者にとってはがっかりいたしました。それに、町行政、そのものも農業政策に対する意欲もさうなく、むしろ離農家を進めようとするような状態、将来の農業へのビジョンを聞き出せなかつたようです。また、農業委員会等でもかけ声ばかりで実行の段階まではほど遠い感じがいたしました。

工場の進出によって繁栄する商店街、企業の恩恵によつての上下水道の完備、道路、公園学校等の充実、人口増加に伴う明るさはあるようですが、必ずしも町民全体のよろこびとはいえないようです。実際には工場の

進出によつて喜ぶ人と、悲しむ人の差があまりにもはつきりしているように感じられました。また、本町のように住民と町政との対話の機会がまったくなく最近、ようやくモニターを選任しているようでした。住民と町政との結びつきが深いほどすべての利点につながる事をつくづく感じられました。

自らの強い自覚を

開発前の農民の姿と、開発後の農民の姿がいつも変らぬ願いを強く感じ、本町も近い将来において鹿島に近いような状態の中で工業化が進むとすれば、我々、農民は左右をよく見きわめながら、きびしい態度で進むべきことと、強く感じます。

